令和６年度

和歌山県立博物館の運営状況に対する評価書

和歌山県立博物館

和歌山県立博物館評価様式（令和６年度事業評価用）・・・・・・・ 1

1　資料収集・管理・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

2　調査・研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4

3　展示・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5

4　教育普及・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7

5　広報・情報発信・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9

6　組織と運営・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11

7　施設・設備・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13

8　財源・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14

和歌山県立博物館評価(令和6年度事業評価用)

博物館長による所見	令和6年度は、ユネスコの世界文化遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」登録20周年を記念して、特別展「聖地巡礼—熊野と高野—」を全5期に分けて開催したほか、特別展1本及び企画展2本を行った。「聖地巡礼」展は、約10か月という長期にわたったが、各期の展観では指定文化財のみならず、新たな調査・研究成果に基いた資料も併せて紹介する充実した内容であったためか、総じて評価は高かったと考える。 さらに県教委の事業である「近代美術館・県立美術館の活用促進事業」の効果もあり、常設展示を含む年間利用者が大幅に増加したことは喜ばしいが、一方で展示方法等に改善を求める声も寄せられており、こうした点は分析のうえ今後の展観に資するよう努めたい。例年と異なるタイトな年次計画の中で、展示のみならず調査研究、教育普及、保存管理に至る多様な業務をほぼ例年の水準で遂行できたことは高く評価してよい。 文化庁の補助金Innovate MUSEUM事業に採択された熊野速玉大社の神像のレプリカ制作事業は、従来の「お身代わり仏像」事業を基盤としているが、今回の制作過程では大学・高校のみならず地元の小中学生の参加によるワークショップを組み入れるなど、新たな地域学習の場を提供できたことは、今後にも繋がるものとなった。 常設展のリニューアルは、今年度、内容を具体化する必要がある。小中学生にもわかりやすく、見やすい展示とともに、実物展示をいかに組み入れるかが大きな課題となる。コンサルタントも含め、幅広い意見を集約し、事業を遂行させる方向性が不可欠である。
評価部会による所見	全体としておおむね設定した目標を達成していると評価される。限られた学芸員と予算のなかで、展示のみならず、資料収集・調査研究・教育普及・保存管理など、多様な業務を高い水準でこなしており、取り組み内容も公立博物館の望ましい形として高く評価できる。また、学芸員の世代交代が進みつつあるなか、業務等の継承も順調に行われており、組織運営が適切に行われていると思われる。ただし、広報・教育普及・保存などで抱えている課題を解決するためには、専門職員の配置を検討する必要がある。 令和6年度は、ユネスコの世界文化遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」登録20周年ということで、会期を全5期にわけて長期にわたって特別展を開催するという、通常とは異なる形態の特別展を実施したことは大きな特徴であり、展示内容も含めて注目・関心を集めるとともに、来館者数も多かったことなど、大きな成果があった。この点は高く評価する。 以前より懸案となっている収蔵スペースの確保と把握については改善されていない点が課題として残るが、資料の収集は順調に行われており、博物館が和歌山の文化財を守る役割を十分に果たしていることは評価できる。 常設展のリニューアルについて着手し始めたことは評価できるが、県当局・県民など様々な視点・意見を集約しつつ、規模や内容を精査していく必要がある。リニューアルは今後の最も重要な課題として認識することが求められる。 教育普及事業の県教育委員会との連携による利用数増は、教育的意義も含めて評価される取り組みであった。今後は学習効果を如何に向上させるかということについても検討する必要がある。 広報や研究成果の発信、さらには図録販売の方法等において工夫が見られ、今後も新しい状況に対応した博物館運営の工夫、努力が求められる。

令和6年度 和歌山県立博物館評価様式

1．資料収集・管理

博物館長による所見	資料の収集は寄託品も含め順調に推移している。収集品のデータ整備・公開は、資料の広範囲な活用にも資するものであるから、「博物館デジタル化計画事業」の終了後も円滑に維持できるよう、課題を整理した上で一定の方法を検討・確立すべきである。 資料の保存に関しては、近時のくん蒸薬剤の製造販売終了に伴い、良好な収蔵・展示環境を保持できるよう、これまで以上に日常的な保存・管理作業が必須となる。収蔵スペースの確保も喫緊の課題であるが、加えて自然災害時における被災文化財の一時収蔵スペースの確保についても考慮されたい。
評価部会による所見	資料の収集は、購入と寄贈、寄託など順調に行われており、和歌山の文化財を守る役割を十分に果たしていると評価できる。県外・他館への収蔵資料の貸し出し実績も多く、これは収集した資料の価値が社会に広く認知されており、博物館が十分に機能していることの表れである。 収蔵スペースの把握と確保については、稠密化が追求されているが、抜本的な改善ではなく、早急に検討に着手すべきである。また画像資料の公開と利用の簡素化については、「和歌山ミュージアムコレクション」が県立3館共同運営の体制下で、館の種別、資料の性格によって対応の検討を進める工夫などが求められる。 展示活用や資料収集にあたって、寺社や個人から搬入される資料に関しては、くん蒸や資料管理が必要であり、現状においては適切に管理されている。現状の虫菌害対策としては薬剤による対応が進められているが、引き続き状況に応じた対応の検討が求められる。

①資料収集
(1)適正な資料・図書の収集とその数量の把握

令和6年度目標	購入や寄贈により、和歌山県にとって重要な作品10点の収集をおこなう。「和歌山博物館施設デジタル化計画事業」(3年目)のなかで、問題点の改善を図りつつ、事業を完了する。
自己評価	購入と寄贈により6件332点、また寄託により142件482点の資料の収集をした。購入・寄贈の件数は少ないものの、展示効果の高い資料を収集することができた。「博物館デジタル化計画事業」については、デジタル公開についての勉強会を開催し、高精細撮影を実施・公開した。あわせて、収蔵品のデータ整備を進め、和歌山ミュージアムコレクションで画像の公開を行った。
課題・改善案	恒常的な資料購入の予算確保が必要である。また「博物館デジタル化計画事業」については、令和6年度で終了したため、継続的なデータ整備・公開の体制を維持していくことが課題である。

②資料保存
(2)資料の保存環境管理、点検調査、資料の修復

令和6年度目標	くん蒸の薬剤(エキヒュームSなど)の販売終了にともない、新たなくん蒸方法等についての情報収集を行い、今後の館における資料の保存管理のあり方を検討する。
自己評価	令和7年度の資料保存・管理のあり方について、方針を定め年間契約にかかる仕様書を作成した。くん蒸については代替薬剤(方法)を選定し、主にはIPMによって対処(収蔵庫の温湿度の調整、清掃の励行、収蔵庫搬入の際の点検の徹底)することを決めた。
課題・改善案	カビの問題については、くん蒸では対処できないため、資料を収蔵庫へ入れる際の綿密な点検作業などが必要であり、CO2くん蒸などの導入の検討と研究が必要である。

③資料管理
⑶資料の管理方法、全体の数量の把握

令和6年度目標	収蔵スペースを確保のうえ収蔵棚の空間スペースのリスト化をおこない、収蔵の収蔵率の把握を行う。また収蔵棚増設等の予算化にむけた情報収集、検討・協議を進める。
自己評価	収蔵棚の空きスペースのリスト化、収蔵率の把握はできていない。収蔵棚増設等の予算化に向け、見積の取得をおこなった。また収蔵庫増設等に向けて、県教委などと協議を進めたが進展はなかった。
課題・改善案	引き続き収蔵率・収蔵スペースの把握に努めるとともに、収蔵庫増設等に向けた協議を県教委などと進めていく。

④資料の活用
⑷他機関への貸出、資料の情報公開

令和6年度目標	画像利用申請の手続きについて、収蔵品のデジタル公開とあわせて申請手続き（許諾）を簡素化できるような仕組みを検討する。高精細画像の撮影（7件）をしつつ、公開用の画像データを増やす。
自己評価	画像利用申請の手続きについて、「和歌山ミュージアムコレクション」からのダウンロード使用など、利用者の申請手続きの簡素化はできていない。25件の高精細画像の撮影を実施し、令和4～6年度で都合42件56点の画像を公開した。
課題・改善案	館蔵品については、「和歌山ミュージアムコレクション」からのダウンロード利用などの方法を引き続き検討する。高精細画像撮影については、撮影した画像を速やかに公開する。また「博物館デジタル化事業」が終了したため、通常予算のなかで、新規撮影をし画像の追加を行っていく方向性を検討する必要がある。

２. 調査･研究

博物館長による所見	学芸員の調査・研究の成果は展示に十分に反映され、さらに紀要・学術誌等あるいは講座・講演会でも公にされている。 調査データ蓄積のルール化は数年来の課題である。情報共有・利用の観点からも早期の明確化が必要である。 他機関との協同研究、科学研究費補助金等の採択も順調に推移している。今後は博物館学や保存科学といった分野での研究やデータ収集の方法も考慮し、施設・資料の幅広いデータ集積を念頭に入れたい。
評価部会による所見	各学芸員による調査・研究は、紀要のほか学術誌にも公表され、またその成果が展示にも反映されており、公立博物館における調査・研究活動の望ましいスタイルとして高く評価できる。また、科学研究費事業補助事業の取得率が高いことも、調査・研究が活発に行われていることの証しであり、その点も評価される。 博物館活動のうち、教育普及活動についての研究成果が不十分な点は課題である。より広く調査・研究の成果を周知するため、紀要・図録解説等のWEB、電子媒体での公開などを検討することも課題である。

①調査研究活動
⑸適正な調査研究、調査研究データの整理、共同研究の実績

令和6年度目標	ファイル名や保存先など、データ蓄積のルールを明確化する。他機関との連携･共同研究については、前年と同程度（6件）参加し、企画展やイベント、論文公表などを通じてその成果を発信する。
自己評価	ファイル名や保存先など、データ蓄積のルールを明確化することはできなかった。他機関との連携･共同研究については、科学研究費補助事業の分担なども含め7件参加し、調査等に参加するほか、講演会（1件）、報告書･研究紀要（2件）等でその成果を公表した。
課題･改善案	ファイル名や保存先など、データ蓄積のルールの明確化をする必要がある。

②研究成果の活用
⑹展示･教育普及活動等への反映、学術的公表

令和6年度目標	令和5年度と同様に、研究成果の公表に努めるとともに、外部での公表の機会は積極的に活用して研究活動の社会還元を図る。
自己評価	各学芸員が研究紀要で成果を公開したほか、市民向け講演会･シンポジウム（20件、館内での学芸員講座含む）、学会での報告（6件）、学術雑誌･紀要等での論文等の公表（7件）を通じて、研究成果を発信した。
課題･改善案	例年並（10件程度）の研究成果の公表に努めるとともに、外部での公表の機会は積極的に活用して研究活動の社会還元を図る。

３. 展示

博物館長による所見	５期（約１８０日）に及ぶ世界文化遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」登録２０周年記念特別展「聖地巡礼—熊野と高野—」は、記念展に相応しい充実した内容であり、特別展・企画展は、刀剣と陶磁器をテーマにしたもので関心を引いた。 常設展示は、リニューアルを控えており、実物展示を如何に組み入れるかなど早急に改善点を具体化すべきである。エントランスや2階の情報コーナーのあり方も含め、中・長期的な視野で博物館全体の方向性をも見据えるべきである。
評価部会による所見	特別展「聖地巡礼—熊野と高野—」は、例年と異なるシリーズ連続展示という新たな取り組みを行った点、また年間の来館者数が44,000人を超えた点など、高く評価したい。 暗い、字が小さい等の展示方法に対する来館者の要望に対しては、文化財を保存するために必要な措置を講じていることについて理解を求める努力も必要である。 常設展のリニューアルについては、県当局・県民・研究者の視点、意見を集約しつつ、博物館の機能・目的を議論し、課題点、規模などについて総合的に検討を進めていくことが求められる。着手し始めたことは評価できるが、その内容については今後の課題である。 アンケート回収の方法を、インターネットでの回答も可能とするなど、回答者の裾野を広げるための新たな取り組みは評価できる。回収率自体をあげることが求められる。

①常設展
(7)展示の更新、計画的な保守・管理

令和6年度目標	常設展の内容の更新（リニューアル）について、中期的な案と長期的な案を考えたうえで、博物館協議会や利用者などの意見を参考としつつ、改善案を早急に策定し、県教委等との協議を続ける。
自己評価	常設展のリニューアル案・改善案について、館内および県教委などとの協議を進め、年次計画の策定に向けた準備を進めたが、具体的なスケジュール、年次計画の策定、予算化までには至っていない。
課題・改善案	中期的な改善案と長期的な改善案を考えたうえで、博物館協議会や利用者などの意見を参考としつつ、令和7年度中に年次計画の策定をし、県教育委員会との協議を続ける。

② 特別展・企画展
(8)コンセプト・構成・展示手法、成果物、来館者・展示資料の安全

令和6年度目標	令和7年度の春・秋の特別展案について、令和6年度1回目の協議会に諮る。また、県下の文化力の底上げ及び将来の愛好者の育成を図るために、地域に根付いた博物館の在り方を念頭に、次年度の展覧会を計画する。
自己評価	令和7年度の特別展案については協議会に諮り、意見などを踏まえ計画に反映させることができた。春特別展「仏像のプロフィール　わかやまうまれ、わかやまそだち」、秋特別展「紀伊徳川家の威風」を計画したほか、紀州三大文人画家の企画展（2本）など、地域に根付いたものを計画することができた。
課題・改善案	令和8年度の秋の特別展案・企画展案について、地域に根付いたものを計画し、令和7年度1回目の協議会に諮る。

③ 館内小展示・出前展示
(9)実績とコンセプト

令和6年度目標	資料の保全に留意しながら、タイムリーな内容のものを3件企画・開催する。
自己評価	9件の小展示をおこなった。1階エントランスにおいて「さわれるレプリカ」を中心とした展示をおこなった。常設展示室内において、特別展「聖地巡礼」とあわせて、コーナー展示を5件実施した。そのほか、2階文化財情報コーナーにおいて、近代美術館「仙境」と連携した展示、学芸員実習生による展示など、スポット展示も3件開催した。
課題・改善案	展示も含めた、2階および1階エントランスの有効活用を考える必要がある。

④入館者の傾向

(10)アンケートの分析

令和6年度目標	アンケートの回収率をあげる（10％以上）とともに、集計情報の分析とフィードバックを行う。
自己評価	新たにインターネットを通じたアンケート入力を導入した。入館者数は大幅に増え、アンケート回収の数は増えたが、回収率は7%となり前年度を下回った。集計情報の分析とフィードバックについては、展覧会ごとに学芸課内で反省会を実施し、展示手法などの更新を随時行うことができた。
課題・改善案	案内や周知方法、回収場所などの再検討をし、アンケートの回収率をあげる（10%を目標） とともに、アンケートの回収率を上げるための工夫を摸索する。また引き続き、アンケートの意見の分析と可能な限りのフィードバックを行う。

４. 教育普及

博物館長による所見	県内小中学校の利用促進を図る補助事業の効果もあり、前年度の約2倍に達する児童・生徒が博物館を訪れた。今後の増加を期待するところであるが、児童・生徒の学習効果をさらに高めるため教育普及担当の専門職員の配置も切に望まれるところである。 講座・講演会等は、参加人数が必ずしも多くない。日時・演題とともに200字程度の講演要旨も提示したうえで実施を周知すべきか。展示室で行うミュージアムトークでは展示に即した短時間の解説機会を増やすなどの工夫も必要と思われる。
評価部会による所見	3Dプリンタによるレプリカ作成については、年々着色のレベルが上がっており、事業の継承も十分になされている。また、学校と連携した3Dプリンタによる文化財レプリカの作成は、大分県など他府県・他館へも事業が波及しており、全国的なモデルとなっていることが高く評価される。 小学生の利用が大幅に増加したことは「県立近代美術館・博物館の活用促進事業」の効果といえる。また多くの小学生が博物館に来館し、学芸員の説明を受けたという教育的意義は大きく、あわせて高く評価したい。ただし、少ない学芸員によって対応しており、教育コンテンツの導入など実施できていないこともある。訪れた児童・生徒たちの学習効果をさらに高めるため、学校と博物館との連携を担う、教育普及専門職員の配置が必要と思われる。 またレファレンス対応について十分に行われており、博物館が社会教育機関として役割を果たしていると評価できる。

①学校・団体の利用
(11)学校・団体の利用実績と広報活動

令和6年度目標	県教育委員会総務課・文化遺産課とも連携しながら、県内小中学校の利用促進を図る。また増加する利用にも対応できるようにするために、教育普及担当職員の配置を教育委員会に求めていく。
自己評価	県教育委員会総務課・文化遺産課と連携して、近代美術館・博物館の活用促進事業を進め、総計64件2,211人の教育機関による利用があり、前年度比で件数にして1.4倍、人数では2倍となった。教育普及担当職員に配置については協議をしたが、実現には至らなかった。
課題・改善案	学校利用の促進を図り対応を続けていくとともに、学校（担当教員）へ直接働きかけるなどの活動もあわせて必要である。学校等団体利用が増加した際の、博物館側での対応ができような体制づくりもあわせて必要で、教育普及担当職員の増員・配属を引き続き求める。

②講演会・博物館講座
(12)講演会・博物館講座の実績、参加者へのアンケート調査

令和6年度目標	講演会や博物館講座、ミュージアム・トークなどの回数を増やしつつ、参加者数の増加を図る。
自己評価	県職員を中心とした多様な内容の講演会・博物館講座を企画することができた。講座・講演会は計13回開催し、例年以上の回数を実施することができ、622人の参加を得た（1回平均48人）。ミュージアム・トークは31回開催し、699人の参加を得ることができた（1回平均約23人）。
課題・改善案	講演会・講座等については十分な広報を行いつつ、参加者の数を増やしていくことが課題である。

③展示解説・ワークショップ゜・見学会・関連行事等
(13)実績の把握、参加者へのアンケート調査

令和6年度目標	現地見学会やワークショップなど、多様な取り組み（イベント）を企画し、参加者の裾野を広げる。
自己評価	講座については、例年以上に13回の開催をしたが、ワークショップや現地見学など、形態の異なるイベントの計画はできなかった。
課題・改善案	講演会・講座以外にも、現地見学会やワークショップなど多様な内容のイベントを企画していく。

④県民との協業

(14)ボランティア・友の会などの活動実績、観光事業との連携

令和6年度目標	和歌山大学ミュージアムボランティアについては、従前と同じメニューで実施する。一般のボランティアや友の会の協力を受けるなど、より広く市民が博物館活動に参加できる仕組みを検討する。
自己評価	和歌山大学ミュージアムボランティアについては、7名の学生を受け入れ、音声ガイド、レプリカ着色などに従事した。一般のボランティアや友の会の協力を受けるなど、より広く市民が博物館活動に参加できる仕組みをの構築はできなかった。
課題・改善案	他館（紀伊風土記の丘や近代美術館など）の事例などを研究したり、一般のボランティアや友の会の協力を受けたりするなど、より広く市民が博物館活動に参加できる仕組みを検討する。

⑤人材育成

(15)学芸員実習・インターンシップ・教員研修などの受入実績

令和6年度目標	インターンシップは、年間8校程度の受け入れをする。「けんぱく・こどもゼミ」については、他の教育普及事業のスケジュールも勘案しつつ、夏に実施する（1コース6回開催、10人程度を受け入れる）。
自己評価	中学生・高校生によるインターンシップは、10校17人の受け入れをおこなった、「けんぱく・こどもゼミ」については、インターネットによる申し込み制とし、10人を対象に夏に（6回開講）実施した。出前授業は3件実施した。
課題・改善案	「けんぱく・こどもゼミ」については、他の教育普及事業のスケジュールも勘案しつつ、効果的な実施時期や規模を検討する。

⑥文化財に関する相談への対応

(16)問い合わせ・質問(電話・来館等）への対応実績

令和6年度目標	県民からの問い合わせに対しては丁寧に対応する。記録すべき内容を明確化したうえで、台帳を作成し適切に記録することを徹底する。
自己評価	対応件数は266件で、問い合わせについては丁寧にかつ早急に対応している。2023年度から、レファレンス台帳（Excelによる表）を作成し、いつ、誰が、誰から、どのような内容の質問を受け、どのように対応したのかを記録化し、それを継続している。
課題・改善案	台帳に掲載し、対応（応答）したものの、完了していない案件が複数みられる。丁寧な対応をし、県民等からの依頼を速やかに完遂させる必要がある。

5. 広報・情報発信

博物館長による所見	特別展のポスター・チラシ等の制作・配付は、枚数や配布先などを考慮しながら適宜行われているし、メディアへの情報提供も、都度行われていて、一定の効果は出ている。HPやSNSでの発信も行っているが、いずれも大きな効果に繋がっているとはいえないのが現状であろう。和歌山城など近隣の観光スポットから誘導できるような方策も考慮されてよい。 小中学生の来館を促す工夫とともに、博物館が「よき学習の場」であることを児童・生徒のみならず保護者にも伝わるように、広報を考えたい。
評価部会による所見	NHKなどテレビメディアでの放映もあって入館者が増加したことは、広報活動が効果を発揮していると評価する。今後は、マスコミとの協力関係による広報戦略の検討がさらに必要である。 SNSによる広報ついては、定期的に情報が更新されており、この情報発信が一定の来館者数増加に繋がっていると推認され、この日常的な取組は多いに評価される。ポスター・チラシによる広報は、印刷部数や広報回数、配布先や配布時期の精査など、さらなる工夫、継続が必要である。 広報の課題を解決するために、教育普及に加え、広報を担う専門職員の配置を検討する必要がある。

①メディアへの情報発信

(17)取材への対応・掲載の実績

令和6年度目標	効果的なタイミング・回数で資料提供を行う。世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」登録20周年として、県観光課やJR、マスコミなどとも連携し、広報を行う。
自己評価	企画展・特別展・イベントなどにあわせ13回の資料提供をおこなった。特別展にあわせポスター・チラシを作成し、対象となる地域等（春の場合は和歌祭保存会など）に重点的に広報をおこなった。特に特別展「聖地巡礼」については、先行チラシのほか、下半期にもポスター・チラシを作成した。またメディアや県観光課などへの協力・連携した広報も実施することができた。ただし、広報誌・メディアへの資料提供などの効果測定が十分にできなかった。
課題・改善案	効果的なタイミング・広報方法を検討し実践する。資料提供以外の別の角度からの広報手段を検討する。

②ホームページの運営

(18)アクセス件数・更新回数、コンテンツ・デザイン等の工夫

令和6年度目標	こども向けコンテンツの導入や収蔵品検索の項目を設けるなどの検討をし、ホームページに載せる内容の整序・充実を目指す。
自己評価	こども向けコンテンツの導入はできていないが、令和7年度春特別展に向けてキャラクター制作などをおこなった。ホームページの問題点を洗い出し、ホームページのリニューアルをおこなった。収蔵品検索の項目はホームページ上にも設けたほか、和歌山ミュージアムコレクションのデータを増補することで対応した。
課題・改善案	ワークシートの作成など、親しみやすいコンテンツの開発を進める。また利用者の意見を踏まえたホームページの更新を進め、より利用しやすいホームページづくりをする必要がある。

③印刷物の制作

(19)ポスター・チラシ・館だより・カレンダー等の制作実績

令和6年度目標	予算を踏まえ、特別展ごとの入館者目標も念頭に置きながら、印刷枚数や配布枚数を検討する。また、春・秋の特別展以外にもチラシを作成する手段を検討し、実施する。
自己評価	ポスター・チラシの枚数については、特別展ごとの入館者目標や予算も念頭に置きながら、印刷・配布枚数の変更を若干おこなったが、予算の関係上、枚数を少なくせざるをえず、広報として不十分なものとなった。そのほか特別展以外にも、「けんぱく・こどもゼミ」の募集にあわせて特別展「聖地巡礼」第Ⅰ期・第Ⅱ期のチラシを作成し（36,700部印刷）、県内の小学校（5・6年生と教員）・中学校（全生徒と教員）に配布した。
課題・改善案	効果的な広報についての検討を進め、印刷枚数や配布先を検討する。また、春・秋の特別展以外にチラシ・広報物を制作する手段なども検討する。

④さまざまな広報手段
(20)多様な広報手段の検討

令和6年度目標	通常予算の特別展でのチラシ作成以外、企画展などでもチラシを作成できないか検討する。SNS（ツイッター・フェイスブック）などを活用した広報を積極的に取り入れ、年間200Tweet、フェイスブックの更新50回を目指す。
自己評価	「けんぱく・こどもゼミ」と関連させて、特別展の情報を掲載したチラシの作成をおこなった。SNSの広報については、X（旧ツイッター）は352回更新、フェイスブックは39回更新した。ホームページ閲覧件数は165,464人で、昨年度より大幅に増加した。またチラシ以外に、県広報誌など県がかかわる媒体への掲載をおこなうことができた。
課題・改善案	広報の告知内容に応じて、SNS（X・フェイスブックなど）、チラシ、ホームページなど広報手段の検討を進める。

６. 組織と運営

博物館長による所見	学芸員の世代交代に伴う業務の継承が進みつつあるが、適切な引継ぎはもちろんのこと、可能であれば業務の見直しや改善も検討されたい。また新採用者は当然のこと、職員に十分な研修の機会が与えられるよう配慮したい。小中学生の来館が増加していることに鑑み、その学習効果を高めるためにも教育普及を専門とする職員の増員を求めたい。今年度は長期の特別展を開催したことで利用者数が増加したが、今年度も引き続き満足度を高める展示を実施したい。
評価部会による所見	特別展を5回連続で取り組み、世間の関心を惹きつけ、年間の入館者数が44,000人にのぼるという結果もたらしたが、このような柔軟な発想、学芸員の協力体制を高く評価する。 また、学芸員の世代交代が進みつつあり、業務等の継承も順調に行われ、学芸員間の意思疎通が十分に行われており、学芸課における組織運営がうまくできていることを評価する。 文化庁等での専門研修へも参加しており、学芸員の研修体制は機能していると評価される。

①組織・人員、職員研修

(21)適切な人員配置についての検討、各種研修への参加実績

令和6年度目標	新規学芸員の採用に向けて、採用時期・専門分野についての検討を行う。学芸員資質向上のため、各学芸員が文化財に関わる国実施の研修に参加できる環境づくりを進める。また円滑に事務継承できるように、館内での研修を行う。
自己評価	新規学芸員の採用に向けて協議を行った。館内における研修は実施できなかった。また、文化庁が主催する「企画・展示セミナー」に学芸員1名が参加した。そのほかオンラインでの研修についても受講した。
課題・改善案	新規学芸員の採用に向けて、引き続き県教育委員会等と協議を続ける。館内での研修機会を増やすとともに、外部の研修にも参加できるようにする。

②利用者数

(22)利用者数の把握・分析

令和6年度目標	入館者数はコロナ禍前の水準35,000人をめざす。また、県民が関心のあるテーマ・内容の展覧会を開催することで、県民全体にとって魅力ある、地域に根付いた博物館となるよう努めていく。
自己評価	年間入館者数は44,218人で、多くの入館者を得ることができた。また県民、および県外のかたが関心のある刀剣や世界遺産をテーマとする特別展を開催することができた。内容についても、来館者の好評を得た。
課題・改善案	冬期の休館（11月下旬～3月末）があるため、入館者数は、30,000人を目指す。地域に根付いた博物館として、県民が関心のあるテーマ・内容の展覧会を計画・開催することで、県民全体にとって魅力ある博物館となるよう努めていく。

③情報公開

(23)使命、目標、計画、評価などの整備・公開

令和6年度目標	「博物館の使命」に基づき、令和5年度の評価をホームページ上に公開するとともに、令和6年度の目標を策定する。
自己評価	令和5年度の評価をホームページ上に掲載・公開し、令和6年度の目標を策定した。また平成24年～令和5年度までの年報をホームページ上に公開した。
課題・改善案	下半期に令和6年度評価をホームページ上で公開するとともに、令和7年度目標を策定する。博物館評価の項目の見直しと有効な課題設定を進める。あわせて、平成24年以前の年報についても順次公開を進めてゆく。

④危機管理
(24)危機管理・防災体制に館するマニュアル作成、実地訓練等の実施実績

令和6年度目標	地震等の防災訓練を実施する。令和5年度秋に文化遺産課によって作成された文化財防災マニュアルを踏まえて、博物館独自の文化財防災マニュアルを作成する。
自己評価	防災訓練は例年通り1回実施した。博物館独自の文化財防災マニュアルについては、博物館内で2度協議を行い、内容の検討を進めているが、策定までには至っていない。
課題・改善案	博物館独自の文化財防災マニュアルの策定をする必要がある。

7．施設・設備

博物館長による所見	空調機の改修を進めるに当たっては、収蔵庫内の資料の安全を第一に考えながら、資料の移動等が安全に行えるよう十分に検討してもらいたい。 「さわれるレプリカ」の作成も昨年度の熊野速玉大社神像のレプリカ作成で培ったノウハウを念頭に、より有意義な事業となるような実施方法も検討されたい。 建物が築ってから30年以上を経過しており、リスクマネージメントの観点からも、施設全体の再点検を行い、中長期的に安全・安心で強靭な施設づくりを目指したい。
評価部会による所見	令和8年度の空調機の改修工事に際しては、資料の状態や収蔵庫・展示室の状況に配慮しながら、安全に改修工事が実施されるよう、周到な計画立案をすることを求める。 3Dプリンタによるレプリカ作成については、年々技術レベルが上がり、事業の継承も十分になされている。さらに大分県など他府県・他館へも事業が波及しており、全国的なモデルとなっていることは高く評価される。同時にバリアフリー・ユニバーサルデザイン等への対応という観点での取組も期待される。

①施設設備の維持管理
(25)日常的な点検・改修保全の実施実績、安全衛生の管理、中長期修繕計画

令和6年度目標	空調機改修にあたり、改修時に収蔵庫内の資料群をどのように扱うか、様々な可能性を摸索し、文化庁と協議するためのデータの集積を行い、実施時の方向性を定める。
自己評価	空調機改修にあたり、改修時に収蔵庫内の資料群をどのように扱うか、空調機改修工事のスケジュールと方法について検討を進め、方針を決めた。業者が決まっていないため、実施時の具体的な方法の決定までには至っていない。
課題・改善案	令和7年度に実施業者が決まり、具体的な実施方法などの協議を進め、令和8年度に実施できるように準備する。

②アメニティーの向上
(26)バリアフリー・ユニバーサルデザイン等への対応

令和6年度目標	「さわれるレプリカ」の作成を継続し、教育普及素材としてもあらためて位置付け、あらゆる人に開かれた博物館展示をする。
自己評価	熊野速玉大社の協力を得て、和歌山工業高校や和歌山大学と連携し、熊野速玉大社神像のレプリカ4軀の作成を行った。また新宮市教育委員会の協力を得て、郷土愛を育むためのレプリカ著色に関するワークショップを開催した。3Dプリンタで製作したレプリカのほか、製作から奉納までの工程の映像を作成のうえ、博物館のエントランスで展示・紹介した。3Dプリンタのレプリカを教育普及資料として位置付けるための取り組みを行うことができた。
課題・改善案	「さわれるレプリカ」「お身代わり仏像」など、和歌山工業高校・和歌山大学と連携した3Dプリンタによる複製の作成について、文化財保存・教育普及など、多様な観点から新たなに活用する方法を検討する。

８．財源

博物館長による所見	展示はもとより調査・研究の着実な推進には、現状を下回ることのない予算の確保が必要である。また資料の収集には購入費の維持も欠かせない。職員の構成では、とくに普及・広報・教育分野に関わる新たな人材の確保が急務と考える。 科学研究費など外部資金の獲得も積極的に進めたい。入館料のほか、図録・グッズ等販売のキャッシュレス化、さらにはネット利用による販売方法も視野に入れ、さらなる利便性を図るべきである。
評価部会による所見	入館者が増加したことに加え、音声ガイド、図録などの売り上げも好調で、歳入があがった点を評価する。図録については、歳入面のみならず、普及的な面でも多くの方々に手に取ってもらえるよう、より魅力的なものになるように工夫の継続が必要である。 また、図録などを通して、より多くの人たちが和歌山県の文化財の魅力、博物館の調査・研究の成果を得られるので、インターネットを通じた図録の購入、キャッシュレス化などの導入が検討課題となっている。 科学研究補助事業の直接経費・間接経費の一定の取得があり、それぞれ研究面・予算面において博物館運営に貢献している。多方面の予算が獲得されている点が評価される。

①予算の確保
(27)財源の確保、歳入実績

令和6年度目標	若い世代の人がより利用しやすくするため、また効率的に歳入増加をはかるため、図録などが買いやすくなるよう、現金書留や郵便小為替以外による郵送購入方法の検討を進める。
自己評価	図録などの郵送購入や郵便小為替以外による郵送購入の方法の検討はできていない。令和6年度は多くの来館者を得たこともあり、図録の販売、音声ガイドの利用、入館料などの歳入は大幅に増加した。
課題・改善案	当館の社会的使命や機能について理解が深まるよう、様々な機会（展示・教育普及）を通じて、県民や来館者へ働きかけを行う。より図録などが買いやすくなるよう、キャッシュレス化など現金書留以外による郵送購入方法の検討を進める。

②外部助成金等
(28)外部助成金等の獲得実績

令和6年度目標	文化庁補助金（展覧会関係）・科学研究費補助金などに応募し、その獲得につとめる。
自己評価	文化庁補助金は1件申請し、採択された。科学研究費の補助金6件（うち2件は継続、うち令和6年度に1件新たに申請・採択、ほか3件は分担）を獲得することができた。
課題・改善案	外部資金の獲得を目指し、外部の研究機関と協力した調査研究、展示活動を進めて行く。